様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月　8 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２０４８０
研究課題名（和文）　１９世紀中葉の中国南部における社会変動と宗教・民族－太平天国運動を中心に－

研究課題名（英文）　The social changes, religions and minorities of south China in 19th century-an analysis about the Taiping rebellion as an example

研究代表者
菊池　秀明（KIKUCHI HIDEAKI）
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：２０２５７５８８

研究成果の概要：本研究は 19 世紀中葉の中国で発生した太平天国運動について、宗教および民族関係に注目しながら、それが中国近代史にいかなる影響をもたらしたかを考察した。とくに運動が発生した中国南部の社会変容について、台北の国立故宮博物院に所蔵された檔案史料、英国 National Archives に所蔵された地方檔案を活用し、客観的な立場から歴史像の再構築を試みた。その結果太平天国はヨーロッパ人宣教師がもたらしたキリスト教の影響を強く受けたが、そこで受容されたのは「福音主義」とヨーロッパ文明の優位に対する確信に支えられたユダヤ・キリスト教思想の「不寛容」さであり、太平天国の急速な発展を可能にしたことを解明した。また太平軍の異常な熱心さや虐殺行為は、20 世紀のマルクス主義と同じく近代社会が中国にもたらした負の側面であったことが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００５年度 | 1,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| ２００６年度 | 800,000 | 0 | 800,000 |
| ２００７年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| ２００８年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 480,000 | 3,880,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：太平天国、キリスト教、民族関係、檔案史料、社会変容

１．研究開始当初の背景
中国における歴史研究は政治の影響を受けやすい。太平天国史も例外ではなく、かつては「中国革命の正統性」を根拠づけるための研究として、現在は法輪功などの反体制的な組織と重ね合わせて研究が行われている。本研究ではそうした政治的要請に基づく一面的な歴史認識を斥け、より客観的な視点で太平天国の全体史を構築することをめざした。それは急速な経済発展の一方で、様々な社会の歪みが深刻化している中国社会を考察するうえで重要な意味を持つと考えた。

２．研究の目的
本研究の目的は太平天国時期の中国南部における社会変容を、宗教と民族関係を視点に解明することにあった。とくにキリスト教の影響を受けたこの運動では、洪秀全がキリスト教のいかなる特質を受容し、それが非妥協的な反満ナショナリズムを生み出したかを

明らかにする必要があった。またこの運動の影響がどのように近代中国社会の特質を形作ったかの見通しをつけることが求められた。

３．研究の方法

研究方法としては、清王朝の公文書である檔案史料を中心に、その附録である供述書や様々な見聞記(その一部はヨーロッパ人のものも含む)を中心に通時的な分析を行うことに重点を置いた。とくに台北の国立故宮博物院に所蔵されている咸豊、同治年間の宮中檔案、軍機処檔案、月摺檔を系統的に閲覧、整理し、これと中国第一歴史檔案館所蔵分との対照作業を行いながら分析を進めた。また2008年夏には英国National Archivesを訪問し、太平天国に関する新史料を発見することができた。

４．研究成果

本研究の成果は、まず研究期間内に発表した論文および新たに書き下ろした論文をベースとして単著の図書『清代中国南部の社会変容と太平天国』(汲古書院、2008 年) を刊行したことにある。その主な内容は以下の通りである。

第一部では漢族の移住に伴って多くの社会問題が生まれた事実に注目し、その代表的な入植先であった広西と台湾のケースを取りあげた。これらの地ではすでに開発のピークが過ぎ、清朝の辺境統治を補完する可能性を持つ新興勢力が台頭しつつあった。だが地方政府は彼らを積極的に活用するだけの力量と柔軟性を欠いており、租税の納入方法をめぐって仲介役を果たそうとした地域リーダーを抑圧した。また権限の小さな地方官は米と税をめぐる様々な紛争を解決できずに地方財政を悪化させ、長官クラスの度重なるスキャンダルは人々の政府に対する信頼を失わせた。

生活の不安定な下層民が米の内地搬出阻止をきっかけに政府と衝突（張丙の乱）すると、人々は出身地ごとに結集して分類械闘をくり返した。この時に科挙合格のチャンスに恵まれなかった客家知識人が抗争に深く関与し、義民の旗印を掲げて反乱軍や対立するエスニック・グループを「鎮圧」し、その功績によって政治的上昇を図る動きが見られた。

また械闘には少数民族の参加が見られたが、彼らと漢族移民との仲介者となったのが番割と呼ばれる冒険商人であった。反乱平定後に総督程祖洛は抜本的な改革を構想できなかったが、問題の所在が明らかでありながら解決の糸口が見つからないという閉塞的な情況こそは当時の中国社会に共通する特徴であったと指摘した。

つぎに第二部は辺境に住む少数民族と漢族移民の矛盾が激化した事実に着目し、一九世紀前半にしばしば反乱を起こした湖南、両広のヤオ族、四川の彝族のケースについて検討した。まず湖南、両広では清朝がヤオ族の定着農耕民化をめざす政策を実施し、これに従わないヤオ族を山中に封じ込めて移動を制限した。またヤオ族に科挙受験を奨励し、彼らの漢文化受容を促した。

1832 年の湖南趙金隴反乱は「大猺王」の出現によって疲弊したヤオ族の生活世界を再生させようとする試みであったが、その後発生した藍正樽、雷再浩反乱では青蓮教など漢族の民間宗教が強い影響を与えた。ヤオ族生員の藍正樽は蜂起にあたって人々を官吏に任命したが、それは官僚就任を成功の道と考える漢族社会の価値観に深く影響されていた。洪秀全が主催した上帝会も同じ傾向を持っており、太平天国に参加した少数民族に安住の地はなかったであろうと推測された。

いっぽう漢族の入植活動にねばり強い抵抗を見せたのは四川の彝族であった。清朝は紛争を調停すべく漢族、彝族居住区の境界線を確定しようと試みたが、彝族にとってそれらは漢族による耕地の奪取を追認する政策であった。彼らは廃止された土司の復活などを唱えて反乱をくり返し、漢族側も彝族の脅威を訴えて敵対的な他者イメージを作り出した。

こうした否定的なイメージに影響された清朝中央は、内地の黄河堤防工事を参考に現実的な対策を提起した四川総督凱音布らを解任し、これらの地を「無用の地」と呼んで経営努力を放棄した。だが不法分子として切り捨てられた漢族移民の不満は高まり、民族紛争の被害を誇大に訴えることで抵抗した。1863 年に四川に入った太平天国翼王石達開軍は彝族の協力を得られずに大渡河で壊滅したが、その背後には彝族、漢族間の長期にわたる相互不信の歴史があった。

さらに第三部では太平天国運動の直接の母体となった広東、広西の社会変容について、洪秀全の科挙失敗やキリスト教受容、上帝教の創設とその教義および下層移民による天地会系結社の結成と「盗匪」の活動を中心に分析した。

まず第五章では、広東学政李泰交の自殺事件は洪秀全に科挙試験の公正さに対する疑問を抱かせ、彼の見た「幻夢」は広東社会に祖型となる物語が存在したことを指摘した。またモリソンによる伝道書の出版事業はかなりの規模で行われ、洪秀全が『勧世良言』を入手したのは禁圧強化前の 1833 年であったと考えられると述べた。

さらに洪秀全が『原道醒世訓』で提起した大同ユートピアは同時代の他の下層知識人にも類例が見られ、洪秀全はが「私心」に基づく行動として広東の械闘や排外事件を批判的に見ていたこと、広州の外国人居住区で行われたロバーツの布教は厳密に言えば条約違反であり、上帝教がカトリック解禁の事例にならって禁圧を免れたのは全くの幸運であったことを明らかにした。

広西に入植した下層移民は相互扶助的機能を求めて天地会を組織したが、清朝の厳しい弾圧によって道光年間にその活動は「減少」した。だがそれは問題の解決を意味せず、拠り所を失った人々は「盗匪」即ち窃盗や強奪などの直接的な行動に訴えることで生存の道を模索することになった。またその規模や活動範囲は次第に拡大し、アヘン戦争後には地方政府の取締能力を超えた大規模な武装集団が跳梁するようになった。

またこの時期は再び天地会が招き寄せられ、後に太平天国の丞相となる羅大綱や江南提督となった張国樑（張嘉祥）が関わる反乱が多く発生したが、もともと大義名分に過ぎなかった天地会の政治的目標は不明確であった。このため人々は従来型の秘密結社とは異なる「救済の言説」を待ち望み、上帝会に引きよせられたのである。

次にこれらの研究から、本研究の課題である19 世紀中葉の中国社会について次のような問題点が存在したことが確認された。

その第一は辺境の移民社会で新たに台頭した地域リーダーを活用できず、問題に対処する能力を欠いた清朝の統治であり、地方政府は漢族移民と少数民族あるいは漢族移民同士の間に発生した利害衝突を調停できなかったばかりか、その軍隊も反乱鎮圧の任務を果たせないほどに弱体化していた。

むろん中央政府もこうした事態を認識していなかった訳ではなく、檔案史料を見る限り道光帝の即位後にさまざまな改革論が提起された。だが財政の悪化に苦しむ地方には問題解決に取り組む余力はなく、大規模な出兵要請をしたために解任された凱音布の例が示すように、支出を嫌う中央の意向にそぐわない要請をすることは出来なかった。かえって広西巡撫鄭祖琛の出兵要請に反対した布政使労崇光のように、高官たちの意を汲んで事態を糊塗することが官界で生き残るために求められていた。

つまり当時の中国において、専制体制がもたらす硬直した地方統治こそは最大の社会問題であった。太平天国の蜂起後、厘金制度によって財政的基盤を獲得した地方政府は湘軍、淮軍系の官僚たちの指導のもとで自立傾向を強めた。筆者は別著において洋務運動が中央集権化の動きを欠いた近代化事業であり、幕藩体制からの脱却が課題だった明治維新とはスタートラインが違っていたと指摘したが、それは嘉慶、道光年間の情況を見たときに歴史の必然であったと言えるだろう。

第二に挙げられるのは、民族間あるいは同一民族内のサブ・グループ間の対立の激化である。本書が取りあげたヤオ族、彝族の反乱や台湾の分類械闘はその一部に過ぎず、雲南や陝西、甘粛で発生した回族（ムスリム）、漢族間の対立や両広における広東人と客家の土客械闘は時間、規模共に大きなものだった。

むろん民族あるいはサブ・グループ間の関係は常に対立的だった訳ではなく、台湾の番割のように両者の境界線上に位置する人々の活動も見られた。また械闘はサブ・グループ間の境界線を再創造する過程でもあった。

しかし相手の不法ぶりを非難する言説は、「犬羊の性」といった敵対的な他者イメージを煽って人々に多民族共生の可能性を見失わせた。清朝政府もこうした否定的イメージの影響を受け、辺境経営に対する自信と意欲を喪失した。清朝はこれらの紛争地帯を「無用の地」と呼んで切り捨てを図ったが、その過程で「漢奸」「流匪」のレッテルを張られた下層移民は反乱軍（あるいは反乱軍鎮圧によって政治的成功をめざす清軍将兵）に加わった。

このように考えると太平天国の激しい排満言説は、民族またはサブ・グループ間の対立が激化した一九世紀に特徴的な思想と言えるだろう。筆者はこうした太平天国の思想的特徴を「正統」にこだわる客家の習慣と結びつけて復古主義的ナショナリズムと名づけた。

また太平天国期は太平軍の中核を占めた広東、広西人と湘軍に参加した湖南人の対抗関係など、省を単位とする地方ナショナリズムが台頭した時代でもあった。

おりしも東アジア全体に目を向ければ、18～19 世紀世紀前半は日本、李氏朝鮮、ヴェトナムで「小中華」のナショナリズムが勃興した時期に当たる。この「小中華」思想は清朝が最早「中華」を代表せず、自分たちこそが華夷秩序の中心だと主張するところに特徴があった。中国における民族対立の激化あるいは地方ナショナリズムの台頭は、異民族王朝の統治下で厳しく規制された漢族ナショナリズムの代替物だったと考えることが出来るかも知れない。

そして第三に指摘すべきは、民衆宗教や思想のレヴェルに現れた社会の閉塞情況であろう。元々嘉慶白蓮教反乱と太平天国に挟まれたこの時代は、民衆運動史の研究において「低調期」と言われてきた。

むろん本研究が指摘したように、嘉慶、道光年間にも小規模な反乱がなかった訳ではない。むしろこの時代における最大の特徴は、天理教反乱の鎮圧後に華北の白蓮教、華南の天地会に対する執拗な捜査が行われたという点にあった。嘉慶帝はこれらの結社を摘発した上奏文を読む度に、主犯たちの名前にわざわざ「×」印をつけたが、それは彼が林清らの紫禁城攻略にショックを受け、民間宗教や秘密結社の弾圧に執念をもやしていた事実を良く示している。

その結果道光年間に入ると、中国南部の人々は厳しい処罰を恐れて一時的に天地会を組織しなくなった。だがそれは問題の解決

を意味せず、天地会の相互扶助機能によって保障を得られなくなった下層民は、直接的な行動に訴えて生き残りを図った。同じことは北部の安徽、河南、山東などにも当てはまり、宗教性の希薄な武装集団である捻子が急速に広がった。

だが彼らの多くは既存の秘密結社と直接的な系譜関係を持たず、その行動様式を受けつがなかったために、思想的に未熟で反乱軍の組織も粗放であった。広東、広西ではアヘン戦争後に再び天地会が蜂起したが、もともと相互扶助組織であった彼らの政治的主張は不明確で、新たな世界像を提示するには至らなかった。

つまり 19 世紀前半の中国南部社会は「理想を欠いた」時代だったと言い得よう。おりからの不況の中で、袋小路をうちやぶる処方箋を持てなかった人々は、外来宗教と復古主義的なユートピア思想を融合させた洪秀全の主張に希望を見い出したのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件：論文６件、翻訳１件）
1. 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」(国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』35 号、2009/3, pp.37-63.（査読無し）
2.(論文翻訳：１)
菊池秀明「太平天国前夜広西的社会変容――以台湾故宮博物院所蔵檔案史料為中心的分析」(中国語) 中国人民大学清史研究所編『清史論叢』8、2008 年 12 月,pp.96-112.（査読無し）
3. 菊池秀明「洪秀全の挫折と上帝教――檔案史料からみた太平天国前夜の広東社会」学習院大学東洋文化研究所編『東洋文化研究』第 10 号, 2008/3, pp.137-171.（査読有り）
4. 菊池秀明「「動乱の時代」の幕開け――太平天国前夜の広西における下層移民と天地会系結社の活動――」『アジア文化研究』34 号, 2008/3, pp.1-42.（査読無し）
5. 菊池秀明「太平天国の北伐中期をめぐる諸問題――山西から天津まで」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』33 号、2007/3, pp.199-229.（査読無し）
6. 菊池秀明「太平天国前夜の広西における社会変容―台湾故宮博物院所蔵の檔案史料を中心とした分析」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』32 号, 2006/3, pp.45-74.（査読無し）
7. 菊池秀明「太平天国の北伐前期をめぐる諸問題」国際基督教大学社会科学研究所編『社会科学ジャーナル』Vol. 55, 2005/3, pp.41-67.（査読無し）

〔学会発表〕（計２件）
1. 菊池秀明「中国史研究的新史料発掘及其運用方法――以太平天国史研究爲例（中国語）」台湾国立台湾大学歴史系, 2008 年 3 月 12 日, 国立台湾大学（台北）
2. 菊池秀明「中国史研究における新史料の発掘とその可能性――太平天国を事例として」2006 年 3 月 24 日、早稲田大学東洋史談話会

〔図書〕（計３件:単著１、共著１、翻訳１）
1.（単著）
菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008 年、pp.344
2.（翻訳）
費孝通編著、西澤治彦等（他に菊池秀明ら 3 名）訳『中華民族多元一体構造』(原題『中華民族多元一体格局』中央民族学院出版社、1989 年) 風響社、2008 年、菊池担当分は「漢人をめぐる考察」(pp.195-217),「歴史における少数民族内の漢族的要素」（pp.251-277）.
3.（共著）
塚田誠之、長谷川清編（他に菊池秀明ら 8 名)『中国における民族表象』風響社、 2005 年。菊池執筆分は「19 世紀前半の四川凉山彝族地区における民族関係とその影響」pp.51-78.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
１．菊池秀明「清末内憂考――禁圧と不寛容が生んだ内憂」新・歴史群像シリーズ 15『大清帝国』東洋の獅子の栄光と落日（査読なし)、学習研究社、2008 年、pp134-138.
2. 菊池秀明「档案史料からみる中国近代」『アジア遊学(特集 資料に見る最新中国史)』勉誠出版 ,(96) 2007/2, pp.118-129

６．研究組織
(1)研究代表者
菊池　秀明（KIKUCHI HIDEAKI）
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：２０２５７５８８

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし